

平成26年度教師海外研修(ガーナ) 研修報告書

学校名	桑名市立光陵中学校	氏名	岩花 亜紀
-----	-----------	----	-------

1. 現地研修に対する各自の目的 とその達成度

(特に、現地研修の経験を生かす授業実践に資することについて)

私の本研修の目的は、自分が持っているステレオタイプを知り、それらを崩すこと。また、生徒たちも知らず知らずのうちに抱えている外国に対するイメージを払拭すること。教科書には載っていない、私が五感で感じてきたことを通して教えたいということだった。実際は、私のガーナについての勉強不足もあったので、毎日衝撃の連続を体験することができた。目的を達成するため、ガーナの環境・自然・人々の写真や映像を収めたので、それらの視覚教材を使うことによってある程度は達成できると思う。当初の目的以上に生徒に伝えたいと思ったことがある。世界で活躍する日本人の存在だ。研修中にたくさんの日本人と出会った。それぞれの方の活動は違っていたが、どの方もその道のエキスパートであり、日本で培った技術をガーナに伝えていた。さらに魅力的だったのは、彼らの生き様である。現在、中学3年生を担当していることもあり、進路学習の観点を含めた授業をしたいと思った。

2. 訪問国から学んだこと (気づいたこと、わかったこと、大切に思ったことなど)

(1) 柱1「訪問国に肯定的に出会う」という観点から

家族の繋がりがガーナ人は強いということが印象的だ。それを知ったのは、2日目の農家訪問だった。広大な敷地に、様々な種類の植物を栽培し、家畜を育て、魚の養殖も行っていた。私達を迎えてくれたのは、大人子どもを含む多くの人々で、皆家族だと言う。農場主のオセイさんが嬉しそうに親族の紹介をしてくれた。私は農場主の息子と話をする機会があった。彼は21歳ケープコーストの大学生で、今は長期休暇なので帰ってきているが、家族の誕生日や父の日や母の日にも帰ってきて、家族皆が集まって祝うのがガーナでは当たり前だと言う。彼の夢は、この農園の面積を倍に広げ、まだ手をつけていない野菜の栽培をすること。彼は何度も"family ties (家族の絆)"という言葉を使っていたのが印象的だ。また、長い間ガーナにいる日本人から聞いたことは、ガーナでは経済的に苦しい農村部では、親族みんなでお金を出し合って高等教育を受ける機会をサポートするのだと言う。経済的に裕福とは言えない環境だが、家族の絆が強い国だと思った。なんだか羨ましく思えた。

(2) 柱2「日本と訪問国とのつながりや同一性を理解する」という観点から

ガーナで、グローバル化の恩恵だなと何度も感じたのは、通信機器の普及である。街部の人々はもちろんのこと、農村部の人々も、ドンポアセの学校の生徒も携帯電話を持っていた。私たちがカメラを向けて写真を撮るように、ガーナの人たちは携帯電話をこちらに向けて私たちの写真を撮っていた。また、ガーナの人と話して仲良くなると、携帯電話の番号を求められた。私は気を遣って海外への電話は高いのでメールのほうが良いのだろうと思っていた。しかし、海外に電話を10~15分間かけても、1セディ(約30円)ととても安いのだ

と言う。コストは日本と違うが、他国に居ても容易にコミュニケーションをとれるという面で、日本とガーナのつながりを感じた。

また、ドンポアセの学校を訪問し、子どもたちに会った印象としては、日本の子どもと同じで、年齢が上がるにつれて大人っぽくませているということ。前日に会った農家の子どもたちはとても無邪気に遊んでいたの、ガーナの子どもは皆がそうなのかと思ったのだが、年齢が低かったこともあったのだと学校を訪れて思った。最高で中学2年生の生徒がいたが、小学4年生の児童と比べると、歌ったり踊ったりチェチェコリをするのが恥ずかしがっているように思えた。

(3) 柱3「共通の課題について共に考え・共に越える」という観点から

日本とガーナに共通することで、私が考えたいことは「教育」である。政治や環境が違うことから、2国はそれぞれの課題を持っているが、共通して言えるのが教育格差だと思う。日本ではほぼ全ての子どもたちが教育を受けているが、やはり家庭環境や親の収入によって多少なりとも差が出てくることは認めたくないが事実である。青年海外協力隊の吉田華奈さんの話によると、ガーナでは公立と私立の学費の差はあまりないらしいが、家庭環境が与える教育は大きい。農家では、親の手伝いをするため学校に行けてない女の子がいた。子どもみんなに高等教育を受けさせたくとも、親族で一人行かせてやるのが精一杯らしい。これらは、日本でも全く関係のない話ではない。どうしたら子どもたちの環境を変えられるのか。研修の行程にあった天水稲作持続的開発プロジェクトに訪れたときに答えは見つかった。このプロジェクトに切り替えた農家の方が、収穫がぐんと上がり、効率が良くなったので、子どもを手伝わせることなく勉強に集中させることができるようになったと言っていた。また、野口研究所でマラリアの研究をしていることは、大人に比べて死亡率が高い子どもの命を救えることに繋がるとわかった。教育を変えることは、ただ教育制度を整えるだけではなく、原因になっているであろう子どもを取り囲む環境を正確に調査し、多方面から変えていかなければいけないということがわかった。

3. JICAの国際協力事業の「良い!と思ったところ」と「今後あるといいなと思う視点」

ガーナだけでも多岐に渡るジャンルの国際協力がなされているが、その全てがガーナの発展に必要な不可欠であり、綿密な調査が事前に行われた後に派遣しているということ。例えば、子どもたちへの教育を考えたときに、単に授業支援や教育設備を整えるだけでなく、元々の原因である貧困や病気などを解消するために、稲作事業や農産物加工技術やマラリア研究などの多方面からの支援を行っていることがわかった。

ガーナに住んでいる日本人の子どもたちのために、週一回JICAガーナ事務所日本語補習講を行っていること。ガーナには日本人学校がないので子供たちは普段、アメリカンスクールに通っている。日本語補習講では、JICAスタッフや協力隊の人が来て教えるらしい。ガーナの子どもたちはもちろんのこと、日本の子どもたちのことも考えているJICAは素晴らしい。

4. 訪問先ごとの「感じたこと」や「学んだこと」

① JICAガーナ事務所（概要説明、安全・健康対策、ガーナの教育）

次長の田中さんの挨拶から始まりました。この時期のガーナは雨季の終盤で、気温は26度ぐらいで低くて過ごしやすいが、5ヶ月前までは目が眩むぐらい暑かったそうです。39度の日本からガーナに来た私たちにとっては気持ち良い涼しさでした。まずは、アフリカの話がされました。アフリカは「最後のマーケット」と言われ、各企業が目をつけて進出しているそうで、特にガーナは他のアフリカ諸国と比べると、紛争がなく、政治も安定して、西アフリカをリードしていける国と期待されているそうです。私が驚いたのは、ガーナにいる日本人の数です。ガーナ事務所で20名、青年海外協力隊とシニア海外ボランティアで56名、専門家が20名、その他全部合わせると300名程の日本人がガーナに住んでいるということです。ただ、日本人学校がないので、日本人の子どもたちはアメリカンスクール等に行き、週に一度日本語補習講を受け、若いスタッフがそこで教えることもあるそうです。その後は、安全対策と健康対策担当の方々から注意事項を聞き、一気に緊張感が高まりました。（岩花 亜紀）

④-1 現地の方の自宅でのフーフー作り&子どもとの交流

農場で農家の人達と、フーフー作りの体験をしました。フーフーの原料となるカッサバを臼の中に入れて潰します。日本の餅つきの要領と同じで、途中で手でフーフーを返していました。日本の杵と違い、縦に長くとても重かったです。つき方は、杵を真っ直ぐに落とすようにつきます。体験させてもらいましたが、垂直に落としてつくのが上手いかず、難しかったです。柔らかくなったフーフーを、パーム油や香辛料で味付けしており、魚が入っているスープの中に入れて、手で食べました。現地の人はこれをシチューと呼んでいました。味はレッドカレーのような味で、食べやすかったです。その後は、たくさん来てくれた農家の子どもたちと一緒に遊びました。ガーナに来て初めての子ども達だったので、私達のテンションは高く、キャッチボールや紙風船や縄跳びやシャボン玉と一緒に楽しく遊びました。とても無邪気な子ばかりで、好奇心も高く、特に紙風船は初めてのだったらしく、興味津々に楽しんでいました。（岩花 亜紀）

⑩ カクムナショナルパーク

パークのガイドさんが案内してくれました。このパークは、よく見るガーナの赤土の自然とは全く違い、熱帯雨林が広がっています。土は黒色、地面は湿気でぬかるんでいて、植物が生い茂っていました。初めて見るような木がたくさんありました。根っこが地上に出てきているのですが、その根っこが今まで見たことのないぐらい太くて分厚く、とても迫力がありました。熱帯雨林の中を登っていくと、全長40mにも及ぶ巨大な吊橋にたどり着きました。この吊橋は、アメリカとカナダとガーナが協力して作ったものだそうです。全長40mと言っても、大木から大木へいくつもの橋がかけられています。吊橋はとても高く、木の目線に立って熱帯雨林を上から観察することができました。（岩花 亜紀）

⑫-2 野口英世研究室

病院の敷地内にありました。研究室の隣には、日本庭園が作られていて、その中に野口英世の像が建てられています。この庭園は、野口英世のふるさとである福島の様子が再現されていて、灯籠や石・植物などは地元

福島から運ばれたものだと思います。研究室は狭く、その奥に小さな博物館がありました。野口英世に関わる資料がいくつかありました。その中でも印象的だったのは、黄熱病の研究をしている最中に自らも黄熱病にかかってしまい、悪化していく自分の体温を計測したものや、死後の英世の臓器などを研究した資料や写真が展示してありました。同じ日本人として、ガーナ人のために命を捧げた野口英世をととても誇らしく、私たち日本人が知っておくべき人物だと思いました。(岩花 亜紀)

⑳ JICAガーナ事務所関係者との夕食会

現地のJICA事務所関係者10名と、私達12名の夕食会でした。今まではJICA関係者1~2名につき私たちがでしたが、この日はたくさん関係者の方に囲まれ、それぞれがたくさんお話ができました。どの方もとても魅力的で、いろんな国でたくさんの経験をされていました。マラリアに3回かかった人や、アメリカ人と結婚されてアメリカにいる子どもに会いに行くのに日本からよりもガーナから行く方が近いのでありがたいと言う人や、既に100カ国以上訪れている人など、どれも刺激的な話ばかりでした。また、逆に今の日本の教育制度に関心をもっている人が私たちに質問されるなど、話がつきませんでした。(岩花 亜紀)

5. 印象に残る写真2点 とその解説

●写真1…ファイル名 [FRK_3229]

◇キャプション： 「あのね、僕は…」

◇解説文：

ドンポアセの学校の子どもたちにインタビューをした時の写真です。私の耳元で丁寧に答えてくれた子がいました。将来の夢を聞いたときには、たくさんの子が手を挙げて、就きたい職業を教えてくださいました。



●写真2…ファイル名 [IWH_3301]

◇キャプション： ガーナの先生や子どもたちのために

◇解説文：

地域の教育委員会に派遣されている青年海外協力隊の吉田華奈さん。後ろの用紙には、手作りの教材の提案が紙いっぱい書いてありました。ガーナの生徒・先生たちのために力を注ぐ彼女は、人柄ともとても魅力的な女性であり、教師の鏡でありました。



6. 来年度参加する先生へのアドバイス（持ち物、必要な準備、学びの視点、注意事項など）

持ち物については、過去に参加された方のアドバイスが参考になりました。ガーナで空路国内便を利用するということで、スーツケースの重量20KGの制限に大変苦戦しました。そのため、服を少なくするために、ホテルで自分で洗うことを考え、速乾性のものばかり持っていきました。エアコンの風を上手く利用すると、ほ

ぼ毎日一晩で乾きました。予想以上に着替えが必要ではなかったです。

海外のホテルはお湯がでないことが多いので、素早くシャワーを浴びられるように、頭・顔・体・歯・洗濯…と全てに使える液体石鹸が売っているのでおすすめです！しかも、薄めて使うので量もそんなに必要ありません。詳しいことはネットなどで調べてください。

私はお土産係で小土産のお菓子担当でした。どの土産も喜ばれましたが、「うまい棒」は特に喜んでくれました。日もちのするお菓子中心に買いました。チョコレートなどの溶けるものや甘いものは、現地でも売っていることが多いです。ハイチュウのような飴でもガムでもないお菓子は海外では見かけないと聞いたことがあるのでいいかもしれません。私たちのよく知って「おにぎりせんべい」は東海地区以外の人は知らないようです。

私は激しい腹痛と寒気に襲われて寝れなかった日が、一日ありました。多分原因は、油物の食事が多かったからだと思います。その時は、食べたくてもある程度自粛したのと、ゼリー状のドリンクや、メンバーにいただいたポカリスエットの粉末を、薄めて飲んでいました。メンバーの心遣いがあり、私は幸い一日でおさまりましたが、今まで海外で腹痛を経験してない人も、このような対策は必ず必要です。

海外研修に参加することになったものの、何を教材にしたらよいかと迷っていました。何を現地で見えてきたらいいんだろうなど。しかし、必要以上の心配はいりません。なぜなら、現地研修に行く前に事前研修があるからです。開発指導者研修ではファシリテーションの方法を学び、海外研修事前研修ではチームに分かれて、調べてくることや教材化することを分担します。研修では時間がないので、メーリングリストを使ってやり取りします。大変ですが、一人で学んでこようと思うと頭も体もパンクしてしまいそうなくらい勉強してきます。それを思うと、メンバーと相談しあって作業を進め、写真や画像を交流できるので本当にありがたいです。また、複数の異校種・異教科の先生たちと一緒に行くので、色んな視点から見ることができます。しかし一方で、自分の専門分野は求められます。私は通訳のお手伝いができずに申し訳なかったです。自分の専門分野は磨いておく必要があります。

最後に、何が起きても「ここは日本じゃない」という感覚が必要です。ホテルで湯が出ない、何かが壊れている、予定時間が大幅にずれる、など色んなハプニングがあるのは当たり前なので、ぜひそれを楽しんでください。

7. その他全般を通じての感想・意見など

たくさんの人に対して、「感謝」という言葉に尽きます。まず、現地研修前の開発教育指導者研修で、NIED・国際理解教育センターというすばらしいファシリテーターのもとで勉強ができました。その研修では、多方面からたくさんの方の気付きを与えてくださり、自分の学校の生徒にどうやってアレンジしたら伝わるかとか、私は何を生徒に伝えたいんだろうと、考えることができます。次に、現地で私たちを快く迎えてくださった青年海外協力隊やシニア海外ボランティアや専門家を含む現地JICA関係者の皆様です。忙しい中、私たちのために現地の人たちと連絡をとって調整してくれていました。どの方も自分の活動を楽しそうに誇りを持って話してくれたのは印象的です。私たちの訪問をととても歓迎してくれて、日本から持っていった少しのお土産ではとてもじゃないけど足りないくらいお世話になりました。行程には入ってなかった協力隊の方がホテルに駆けつけ

てくれたほどです。ガーナの方々が、見知らぬ私たちに対して、とても優しく意欲的に接してくれたのも、間違いなく協力隊や専門家の方々の日頃の献身的な活動のおかげです。そして、一緒に研修を共にしたガーナチームの皆さん、NIED 久世さん、JICA 古川さんにも感謝の気持ちでいっぱいです。みなさん個性的な方ばかりで、経験値が高く、メンバーと話しているだけで刺激され、とても勉強になります。私、やらなあかんやろっ！と、モチベーションが高くなります。「私はこう思う」「僕はこう思う」とメンバーと話しているだけでも、十分な国際理解教育・開発教育になると実感しました。

以上